止戈類纂

廿八

和書門
類
二五二二三號
九七函
八架
四九冊

内閣文庫
和書類
二五二二三號
四九冊
一五四函
三架

内閣文庫		
番號	和	25223
冊數	49(34)	
函號	154	20

国立公文書館 National Archives of Japan

此頃かゝる事を集て遣しぬ たとへハ甲ハ強弱の事なり
ことにあまて其物を今もいひ出ハ實殺無益をもはるかにいひ
古来よりの説ハ如何にと思ひ 甲の物まを論しける
數ならぬをのこ集まりて引出し 手帳に書て稱へある
趣を能く一言すゝ數の人物にて如何るハ未年の事の
ことに其物の文をもちて首に加へぬるてなん

弘化丙午十月

[illegible]

止戈類纂第二十八

兜鍪

豊藤熟之編輯

権現様上意ニ小身の武士ハ料の具足ニ甲付おとさせ候時胴小具足なとハ兼相ニ被渡させ候甲ニ念入候ハ何ゆへそと子細ハ討死を遂る時甲ハ首と一所ニ敵の手へ渡る物なれハ死後の為ニてハなきかとの 御意に有しとそ 右の上意ニ付上田主水入道宗古被為語候ハ侍ハ戦場ニ於て討死をとけ首ニ成る時乃儀を心ニ懸て居る能ハ[illegible]ニ依てさうやうに[illegible]うしろさうあるへ首ニ成る時詮につらふになりて見くるしき胄うしろ[illegible]ニ制する[illegible]ハ陣中へ持参して[illegible]日ハ必一戦と思はれける前日

日本政府図書
明治十二年購求
鈴木重壽南山樓珎藏之記

又ハ月代をそり首をさしむけにねずみ色にする一の由也しの由也　後ニ出座
加藤左馬助甲をハ后に立を入下りたる甲ハ首に付たるに
とられたる者の茶へ出るものかれ之具足ハ兼ねて仕立まし
いつ方にも捨らるゝものなれハなりと依て左馬助甲ハ諸の手本結構
ありしとなり　大嶋雲八ハ明珍ニ茶椀同筆写書
しの数奇に茶に好む称し由出ると御求を被望候し御仕方にて道具琉発
出ふとして御望ハ昔の武士ハ出ふと一ツを手前二手前にてならせしに
今の世ハ四面皆くならかふとさまに秀吉の天下治まり中極て
武士のたハおとろへ只今の人々ハ薬ミん薬入て一世をしひを入身を
やつし武具をハあためかしも不知ねハあさましき風俗是非なき仕候

むつかしくいとも御内入らくの御座に武士のさてたる具ハこそくあふとする
ものて内証に古肉に武具の上より八方にまし兼ね八出座御町ふとを
ねくこそせ山のりふとして手前の薬入しおまいもしそれと武士とハ
下し也やおりしきさる也たるに　石門丈山答青木氏書簡
津田氏茶曽の称すとするを見て古今の内外十権の曽をも見てさも
らふとも申しは称ハ出ちんあとを動もものあとなので皆曽なり武者かも
まつハに見合れい之津田氏易仙後道座という浪人之　武功雑記
日根野備中白さら戦場にて諸の手矢玉にあれさるをまし
甲を打落されたるやとあまた度まて曽をなでゝ見てゐるを打
抜れハ曽のたきなりも言きも場に際して昔まからぬものとこ　里

小笠原右近大夫上杉の加勢として同国高遠の保科弾正忠と戦ふる
弾正ハ鑓弾正の子大勇者にて城の門を開きて討出て退ちらす
神君よりハ信玄の軍立の様子甲州流の等を放甲矢剣うちを
て用とし家来流儀られ上方の弓矢にて名の用ゆなり　柏崎物語
細川忠興入道三斎ハ茶人にせし老人浪人して京都に在しかその
物語る摂州一ノ谷二ノ谷と云事て　将ハ一ノ谷兜と鉄蓋の筆と云
黒田如水居城主竹中半兵衛重治の兜ハ一ノ谷と云所の名左馬助
後秀の兜を二ノ谷といふ組一ノ谷の兜になうひたる名物なりと云
也なり柴田伊賀守勝豊の兜ハ鉄蓋の筆と云是ハ一ノ谷に擬ね
手ら人の兜なりとのうのなり　想して名物の兜ハ浦野若狭守の小水牛

黒田長政の大水牛日根野織部の唐冠兜京極若狭守の十王頭稲葉正則の
巳股康の角本多中務大輔の大鹿の兜蒲生氏郷の鯰尾伊東久内の蛤
細川三斎の山鳥竹中半兵衛の一ノ谷明智左馬助の二ノ谷柴田伊賀守の
鉄蓋の筆矢田作十郎の鯉の兜武田信玄の諏訪法性秀吉公乃
八日の月　台徳院殿の御白角頭巾の御兜是こそ世にかくれなき
名物なり加藤清正の長烏帽子蒲生彩右衛門の帽子形とも世に名
高き兜なり　武辺咄聞書

三谷曲の名たるき
物の作る名分
よきは唐信虎の
良馬の詩と同く
唐津に伝へる
武家ハ喜しきみ
なり

天正十九年秀吉公聚楽の普請出来にて名代に遣しありて天下の
諸大名町人まで御祝儀を献上する其内に日根野織部ハ御兜をとる
千利休ハ石燈籠を上る日根野か献上する御兜の立物銀の八日月

なり利休か上しゝる石燈籠の火袋八日月なりき人ハ武辺の数寄一不
案内の数寄者なるに或人の子一同して未知ゝるゝこと時のとより
沙汰之ハ日月の御兜ハ大坂落城の節焼滅せしとぞ生駒家間ニ補
物語に八日月の立物ハ御兜の後に立ツ月之ゟ一程隠れ上も兜の
上に出るなり中と見えたる立物なりしと申されしとかや 同上

小牧ニハ榊原小平太斗り居る 神君ハ清洲へ御為小平太ハ車の
紋の旗を立て奉従として居る秀吉桐隠にて金唐冠の甲羽織
斗りにて（纓ハ馬上なりのヒヨウタンの纓）巡見と汝小牧の名を付くれ秀吉を討てと候
旭を御のごとく押寄る皆大将其旗小口をおし御退山根皆ゝ中秀吉
御出ゝ掘子名将に中るものにて有りし 某ゟ見斗の付之路つふし

なりと申伝られけり 柏崎物語

三河士に蜂屋半之丞といへるものあり永禄三年石ヶ瀬の戦に緒川の
兵士今の鑓比肩を争ひける者ありしを矢田作十郎是をとらへやうと使を
やりて先求めゝれハ許し矢田か勇を知りて猶ゝゝり蜂屋上れと
見てあさけりに矢田ニ先ニふよりて矢田蜂屋に逢ひたる時其兜に疵付
あるをと云たる所のとし又石ヶ瀬の戦に蜂屋鑓の兜を見て出たりし
石川伯耆守先んじけし待ちられハ許云ゑひたり蜂屋恥しさるに
よりて後の軍にハなかりし先んじ待りし 太平夜話

或人の物語に日本多中務大輔忠勝の甲ハ黒塗の唐の頭あって
本領余さ有るにて威しくとふ又天下の名物と云康の角乃

山中は右にハかしまさるといふ斗にて结構にハなかりしと物語之 右ハ武勇覚書之

天正十二年三月廿一日巳刻より岸和田へ紀州根来雑賀廿二日の朝城中

にてハ大敵なりけるを見て中村式部少輔か下知を待すして平雄の

士とも同の若武者を呼集めてなしとて三人四人打連て塀柵を

越て打て出さんとする時に分れて寄手へ打向ひける一氏を矢倉より

見けるハ大勢何まう寄手へ呼かけ家老平門助右衛門毛

無事母つハ退て使者を出し引上ると申遣しけると一氏見て是ハ

士卒よりも争ひに出んへ引まう味方に乞業ある時ハ引上たるハその

離れしたまてけつく被分れの時敗軍になるものなり我出て下知

すへしとて鉄炮を以て兜の備をしめける事あるしを押出し岸和田

城を打て出る先へ行まうしける二口の先勢在るかまた堤を切つり

見るまに夢至の着る下岸和田より押出しけるあひや式部少輔出られ

けるといふ程こそあれ二口の先勢いさまきつんて寺方四の紀州

勢へ押かゝりし寄手一さゝへもさゝへず敗軍す 武辺咄聞書之

秀吉公小田原御陣より奥州白河まて御動座有翌年御遠慮の和

家康公の御家老本多中務大輔忠勝ハ一旦退治として下総の庭南に

ありけるを召出され御前へ参る事有秀吉公ハ諸大名出仕の中にて仰にハ

我か今日天下を打取る時然ニ此野州より佐藤忠信か兜を求め出せりとて兜

忠信か武勇数百年の後今に到るまて人口にのこつて不朽といふの

ありされハ当世にも渡忠信に劣らぬ忠勇無双の副将共にてもいかさんと

思ふなり今天下にて忠信にならぬ者ハ誰にてあるへしやいつれも
申上へしと云御親も涙にてあまたおいるありしを亦三御前へと申一者を
申上る人もなし其時秀吉公御涙にハ今の当世にて誠忠信にて第ら勇
者あれハあると仰られハ　家康公の家臣にて本多中書こそ子細ハ
先年長久手合戦の時池田勝入父子数武勇有しと　家康公に
打向ふれハ全くを抱にて我か味方の人数にて早く楽田を立長久手
表へ駆付る　家康の旗本是を討んとおもひきりこそんで然るに此所
中書も小牧より長久手へ赴く途中にて秀吉の大軍と呼町隔て
ならひ押にたる勝の勢己つかりに五百余騎なりしか手勢にておしも
不屈我ちか大軍に挑むる此時中書公に下知して曰く家にて秀吉の

軍へ一戦を遂へしとたゝかい押ふの始と放て　秀吉長久手の方へ急
帰すへしとたゝかい長久手表の合戦一定　家康十分の勝利なるへし
去まて秀吉を遮り相討死して上方勢を長久手へ遣さるを全
見のせとて五百余騎の小勢にて立ふくく巻う来る手勢決死と
して秀吉の大軍を捕ふも不足鉄炮を受ける旗法大将も
是を討んと思しかとも秀吉不許彼軍もおさへて八里計の間
引つまてりしに康の角流の兜を着たる武者一騎川岸へおりて馬の口を
洗ハせる秀吉是を見て大将かの者にも見ゆるか何者そ誰も不知
と問しに稲葉伊予守是を見て本多平八郎にてあると申す
秀吉不覚感涙流れ皆ゝへ申しける平八郎好ミにて先陣をうけ

敵合の吉方の中へ入るを見てうしろより鉄砲まのあたりにうたれける只今
又かれか二萬三千秀吉か大軍へ敵對せんや猶ますます勢をさし合戦
をはしむるの秀吉かたの手負を見させて　家康手勢を集
させん為なりけり古今の勇士忠義の士てさへかくはまさる敵
そのみんや只今平八郎を失ひうとて秀吉運強くハ軍にて負
たらへ　家康数万の勇士を捨ても秀吉運強くハ軍に勝ん
必平八郎を討へからすと思ひ割しぬ此時の働き忠信の故なる
まし此故に忠勝か兜をハ中書まて着しに此兜は明日忠勝を
御家へ召返し候とて此兜をハ中書まて着下さる人皆うら
やますといふものなし　同上

文禄二年正月大明の李如松か大軍を切やぶりける時合戦未
始さる前黒田長政歩騎歩士七八人にて隆景の旗本へ来り見
廻られけるに隆景見て長政ハ幸の所へ御越候栗屋四郎兵衛
井上五郎兵衛を遣し先手へ申付ハ猶なれぬ者共にて今日の評定も指図越
先手にて鉄炮打る所見ならで下知して申されけるに長政其坂の
者見へ罷りとて先へ行先手へ出鉄砲はじめ正月廿六日辰刻の事
なり朝鮮ハ寒国にて雪ふかく寒きなる事甚らす長政ハ大縁帽子
を着し兜をハ郎等に持せられしか隆景の先手へ出るとて縁
帽子をぬき甲を着て着しけるに家臣例の水牛の甲なりけれハ
水牛の角本を葉にて結ひ付られける故甲の緒をしめ先手へ

さ出し人は隆景旗本数千の士卒と見えて長政の先手へ
切かゝる今日の軍の備を敵ひなしと惣軍いつれもいさみ
ける所なり長政当年廿六歳なりきとかゝひにて前の如く戦たゝ
諸人目を驚しけれは中々凡人にてあるましきと称す 同上

岡野左内猩々緋の羽織に松川合戦の時政宗の太刀付し跡
二ヶ所金糸にて縫合せて平服となす上杉景勝米沢へ下
移の時左内浪人する政宗二万石にて召れれとも年々中以上
左内は蒲生家に名残ありとて仙台へは行す蒲生秀行会津
六十万石にて帰住しける時左内壱万石にて出る蒲生家
にては名誉の侍なり会津旅人にて関ヶ原の陣終りし時も

永楽銭壱万貫を景勝へ上ヶけるに是を蔵め置ける所に左内は是を
て座上に二振並べ振並べ百貫目百文銭を侍衆へ備さす若く用に二三度
大書院一面に大判小判壱分判を並べたり其中に枕して
金銀をならへあくさゝにする世人指さし見くるしき所行の
如く見てもなしと嘲り批判せり或時近所の侍見物に出集て大なる
に及ぶ左内是を招きて例の金を書院に並べて見する折なるに
此様子を家臣に告る秘蔵の正宗の刀をさし彼所へかけつけ
一日二夜の扱ひかるゝにする事左内に彼所に皆夜まし給ふと申居に
天ちらせし金銀のものなとかしけれは扨出棟をして左内か志
人々不感といひけるなし一ゝ摘の中に何として持ちたる人黄金一枚

中古まて人を達へしこそ滑川の浅きあり

此人ハ不一て此越へあり不学の故なり

不持しけるか左内守て已れハ妻持たる是之上下共に金銀を不持
しては すり切く武辺も成らぬ也よくこそ金銀持しとて
褒美として黄金十枚とらせける此左内後ハ岡野越前と号す
元来切支丹宗にて右左内か政宗に勝負せし時に着たりし
角栄螺の兜ハ南蛮の伴天連より音物に送りける物なり
其子源五郎死去の後ハ下人共か左内か遺物錣口の具足並角
栄螺の兜を持紀州へ下り此処に布施佐五右衛門と申仁買求る
よし云伝ふ流浪物語なり　同上
大坂御陣五月六日に山口伊豆守ハかけろふといふ重代の甲持
緒を締緒朱威の鎧に緋地の武羅に金にて松葉菱を出し
たるをかけ白き小幅帯の差物差して必死と定めけれハ何らハ泣て
ためらハさる二番三番まかけ入戦ひしとそ此かけろふといふ
甲ハ先祖より伝はる甲の鉢ハ頭形星甲にて立物にとんほうを付
付けたる尾の方をとすまし蜻蛉羽を鍬形に用ひける　採要雑談
竹中半兵衛重治ハ美濃の菩提の城主也後に秀吉の軍事に従ひ
謀略ある人なれとも外見たる所ハ婦人のことし軍に臨む時も極威
なる馬に乗りし馬ほに包める冑を光本寺の羽打一ノ谷と名付たる
甲の緒をしめ徐り返りて居たり重治命ハ敵毎に士卒を戦はす
して既に勝たりと勇みあへり　常山紀談
摂州中国の立松山新助か家臣中村新兵衛ハ度々の誉ある事ニ

白竜奥勝の結ニ依る武士の名記ニ見へきなり

為て時の人〻鎗中村と称す中村ハ武芸の稀薄をいひなせり新参り
兜ハ唐冠（冠）纓ニ猩〻緋の羽織を着す数万を見てさりや
例の唐冠ニ猩〻緋よとてあへて向ひ近つく者なし依て此武芸
ハ兜と羽織と無双の武不重しかれハ中村従方なく是を与へ其後
戦場ニ望むニ中村か兜か羽織を着して出登るニ数万へて
事ともせす槍と戦ふ中村数ヶ所を突数し終ニ討死す然中村
と知られけるとなり古記ニ見ゆ
蒲生玄蕃良重ハ古関白秀次公ニ仕へ候玄蕃ハ良政か二男
ニて候庄関白没落後父良政浪人仕候を古和泉守頭ニて
讃州へ参り後年如関ヶ原ニて討死仕嫡子良通十二歳の幼年ニ

此後玄蕃の人お之を無し然ハ無程病死仕候ニ付良重九歳ニて跡を継候を
手を附ける者中村掃部を加へ造ハれ成長ニ従ひ怨骨摘へニ鉄
砲根ニ而大坂ニ而仕候去年大坂城攻の御立夜お御家来松井喜吉
討死いたし自身ニ而ハ引く竹把の表へ出家来ニ而下知の様ニ親ニ
不劣勇士と人〻称申候生大坂当年出陣萩津の城古和泉守
唐冠の冑ニつらぬ玄蕃ニ附属仕我か壮年の時分此冑を着し
度〻合戦ニ一度もおくれを取る事なし是を以て譲り去方
あらておくれなしと称し候中ニ而候ハ玄蕃殿因ニ余りいろいろ
して勝れたる名を顕し主人の恩徳ニ報ゆへしと称へ候依て
今年廿三歳ニ而剋余ニて二十間の大幟を指物ニいたし

気ゟ得ざる不堪残念なりなどゝ申血気の勇猛ゆへ待申候唐冠の
冑脇立抱へ并左右へ五六人ものともに我目にきらめき池生する事数多人
あらす前又人ハなり萱振西の方ニおゐて居申候處も皆錦頭
自注一日西邸の村中へ引入申候玄蕃儀ハてらけへ申候村口ニて只五人
踏止り候我等申處へ舎弟も有之す家へ寄せ一人突伏候得共
家来つゞき不申故下り候首を两人と仕候処へ又二三十騎むらくと
者共もにつき懸り寄一突其後迄ちり民家の裏へかくれ
申候後へ追候得ハ先出様ニ切申候お向候得ハ迄申候あるき
より先ッ出候大の色さへ申内中白の其方ハのさし物有之候我等走人
出向候様にと合申候処へ玄蕃殿向へ寄通候ニ手傷左の手ニ而押立合
申候處ニ迄寄候儀不成候故迄ゟ引合申候処へ玄蕃小姓
押川権左衛門先来渡辺を切倒し首を取申候ニ其外家来四五人
かけ付候人々と肩を並べ退申候処を数来り候付而踏止り我
小姓福島長右衛門文蔵の者討捕候を見玄蕃を討き宝串川と
引取申候押川衛門を追のけ途中にて先付候人の家方いろと
相尋候得ハ彼れ実ハ姓にて我ニ脇差の小柄無之定て戦場ニて落
成り無念の儀と申候処押川又之進尋候得ハ見へ不申候付
右人の方へ急き基塚小屋へ帰り見申候へハ小柄ハ小屋ニのこり居
申候ニ付陣ニて妻子申候引付家来とも有之て抱下し
冑も無之ならハ小屋へかきへ出んと仕候処ニ何やらん手を揚

くるしき故にて太ねかくしとや此より先ハ三人ゟり雅楽の胄
にて唐冠の脇立据せられ小原につゝへ拵しすれし今ハの際迄
君恩を重し比もき人ゝ感じけり古和泉守祢ゟり手迷小屋へ
見舞中比場所子右こそゝ土にも絶し無也ゟる人の面を并迎め
此者子め社此場ハさしもの和泉守も胸せまり玄蕃かく申けり下よ
云也出右中比里拙年刻子絶命仕比 元和志た年録
永禄三年大高の城へ浄入の刻今川義元討死諸将後明へ引退比
時玄蕃見之の召捉若狀為比奪取服須左京と中付添遣夫
大高之塔方へ一紙子此者書頂戴仕左京子ハ此所思召有右高様
子ハ此形金にて居候者し浄甲三ゟ下比 渥美家伝

樽崎和泉守宗家ハ生ゟ執武つの男か今日子至てらくくる上ハ
最期の勇を揮て鎧を市中に曝し度候と面色勃々歯を
咬て西上野八幡の住人蓬莱吉兵衛に連るゝ鶴尾の
兜にこ赤柳の旗立し黒糸威の鎧を着し太長刀をかいこみ
宗紀を抛て腰に挟こ城ゟ人を頭と寄らせ大根の打登の馬標
例子引付除しと打出ゟる 小幡家書
宗勝云井地峯以退治の時以旗本より見掛大鼓の三を合て
太夫子を放る拍子にゟりて敵悉く敗軍し四面八方へ逃散ゟり
手内井地峯へ多く退きけるを蒔田氏のさしと捲ゟって井地峯より退治
既に附入にせんとするを以て敵大手の門をハ塞て裏門の方へ退るを

退きて城内より弓鉄炮を発す並ひ其外の塀際十四五間隔て横
合にありける武者も不残之四十余人退く故味方手負死人四十人
出来しを時の検使井筒女之助家配をして退く味方の兵を
以て返し家功を弁へ知しては引揚させる武功の業なり
是より文储を操根本の所へ遣て此伊豫の家を右に見候ふ
門を通り押通して攻候ハ敵幕を引へて出ても不仕之右の女之助ハ本国加賀の士なり還任二四代の使
番をて数度武功の誉ありしかは仕組して名ある小姓番組の者を選て一柄擁して女
仕之に仕京勝云の苗字也云其の時の長束者れハ諸人に越て戦場一人且之に　蔵田
一手へ討取首数三百四十九其外の手に討取首ハ七千余なり京勝云
家是へ向ふると云ふ其の家にて首実検ありて其々に向蔵六の時蔵田
と一家にて出馬の時々向蔵六中黒之足一所向馬一疋其下に沢手之

直勝をして出て挿鉢の内甲に黄金一枚添て下諸人に勝れて此節
其時の作に軍八井地筆城際矢鉄炮迫急にして首一つ討取とて
之也返首なれハ其を内取上げ取て此小返一家の傍に顕なりと
仰談之附正面の内味なり扨又刀にて一家に小返ハ一家の名乃神と
名付く武功之の沙なり弓鉄炮をもさその沙なり　翁家武鑑
江州姉川陣の時に京左近右衛門後段に着したる猩々緋の陣巾
胄ハ黒塗の頭形に猩々緋をうけて前立物は輪空風火水地の
五字を書くらせ其胄子孫に伝へさる子塗をけて見苦しとて猩
々緋を取て持塗立す　大樹吉宗公紀州より御座ありし時此胄の
事を聞及ハせられて　台覧の上さしも珍とも着の形なく新作
ある故いかゝなりとて先年火事の節焼失仕候と申上しとなり

実にありし事なり　元寛筆記

池田勝入馬に離れ也ましく返せ猶入今これに居ると呼はりし所へ大勢近る
廿計の方とさして寄る故勝入も浅田入へ引拂ふを永井伝八追掛
詞をかけ近寄に鑓付組伏首を取れ勝入勝若を掟を討とる　此時十九歳なり
果然桃形の甲なり　蜂屋七之助勝入家来を討れ　柏崎物語
大明勢ハ蔚山へ取りけり日夜手につき攻られ鉄炮に手負ひられし
自害をせず明日此攻をすへしとて極へたる処に廿三日早天に
清正手勢二十艘計にて如法の旗を押立例の銀の長帽子の
冑を着し長刀を脇にたはさみ舟をさらりとのり其の岸ささに
立上り候兵に下知をなし城中へのり入たる　古橋本（偽カ）清正記

御勝利の旗　家康公関ヶ原町口尾町より南宮二子の野山に
御旗を立られしは諸大名斯御旗を見益く勝気ある
内府公ハ素白といふ南蛮一枚もの御兜を召し御采麾ハ白紙
に其行を掲ありし黒漆紙にてくり尾毛とや古実の
采なる御采麾を持せられ床机に腰をかけて御討首あり　校合雑記
大津攻の時立花左近立花ハ立花左近将監統虎か先鋒
男今をとかるへし手下の諸卒を励し外戦地に滅き身も手疵を
蒙り家人数多手負討死し又ハ捕る名せしもの多かり
あるこれにて統虎より吉右衛門と当時の褒美として実父
なる橋本伝来の如くの冑　此冑今に子孫の家にあり　筑紫門色とて比すに

あまりたる駿馬年来秘蔵被ぶれしを感状に差添附与せ
られけるとぞ　武家高名記

庚子城攻下田の戦に一揆方持寄之河原にて洗革の鎧に三尺
柳の葉ふとなる胄をき大根の打物をさし葦毛の馬に乗て
左右七八十人具足にて堀丹後守直寄と同しく出張の鵜尾の
胄に河原毛の馬に乗たる若武者こそ丹後守なれあまする若者
組て討とりつてこそ名をとりける　加越軍記

慶長五年八月朔日に下倉の城へ押寄りけ城には堀久左衛門
秀治か内小倉主膳正政熙并秀治菩提所蓮正寺と以上一向宗
の僧楯籠りて町口を拒へんとしたりけるを上杉方より錦地

出て射立打立たる風に打たすを見えれは城方不叶して引入る所を飯田神得
為猪に乗て二の丸揚鎚を附入にして攻入られは小倉主膳は葦
毛に乗り燕尾の胄浅黄の羽織の裾をとりけ徳長の鎗を
提け自身突て出る是を始と防戦ひ敵も鎗を以て突尾と
出し放合ひ主膳斗りは引揚ぐ七八人突伏しられは寄手
かし引退きたる隙につとたて上鎗を着たるも丈夫にして
城を守れしと錦地にて防戦せり　同上

松川合戦の良和山伊賀守景盛の鎧の胴の前を胄に用ひ黒
と金箔にて毎に衣服に仕様の熊毛を熊の皮を以て鳩をくらせ
指物ふ添差中に雑賀小平太按叡に張の烏帽子胄射向よ

日の丸を付たる差物無地に白釘抜の指物を指中にも実に定めは［illegible］
長谷川の鎗にて江州山城にて是方近くしられたと下知せられは上泉主水
必ず彼と申し捨て敵に向ひ上泉主水と申し別のものを討取りへと名乗
かけ死狂ひに数十人切伏終にそこにて討死しける首をハ今に京
東寺に葬られけり上泉主水ハ曽の者向に墳験に
書伝へたる 常山紀談

黒田長政家臣小河喜助政良ハ会津にてよき首を捕ル又関ヶ原
にて会津へ入て鑓地を退去せられし時も殿敵する武士を討取る
武功に依て慶長六年正月十六日新知百石を下へられし時太郎
十七歳なり長政ある時竹中丹州に逢て半兵衛秘蔵せられし蝶の
盔を申請きといへれしに半兵衛の御家にハ一の谷水牛の御盔あり
其の盔を預しかしと返答せられしに長政重ねて是ら家来に
雉の角と称する振の兜あり御盔を預りて八渡して
させて半兵衛の御武功にあやかりせんとなられハ丹州も左に従せられ
太郎兵衛に与へらる蝶の盔又ハ会津にて拝領する黒の盔を取形り
日の丸を壊之二物なり長政雉の角を取れるといへれしハ太郎兵衛会津
関ヶ原の働感賞せられし故とかや太郎兵衛後兄が名を付て久太夫
となる 別本ある旨續

元和元年出雲守政十六歳五月乗田大坂城出政又従ひ
兄忠之も大澤響与康角曽孫政曰一兜殺着者豊臣秀吉

縫秀康ニ々錦織義ニ々今以与平吉子ニ々實分急将道 御所柿ヵ
若江合戦の時渡辺勘兵衛ハ山本阿野村の敵を掛散し南の方を見候へハ
仁右衛門・新七郎・勘解由敗軍し旗二本討せ候ヵ残る味方ハ地をころを踏え
敗軍仕候を勘兵衛横を入長曽我部か勢をくずしけちらし首九ツ付候得ハ
敵をハ西へ退散東へ追敵を南へ追ちらしけ首十八ツ討取故ニ矢尾
より一町余西の川通り堤涯ニ長曽我部か幟二十本計見へ候へハ勘兵衛
是を付満のりせしと申して堤へ参り見候へハ矢尾久宝寺の間の川橋を
境ニ而て二百三百ツヽ村立て通候ハ久宝寺へ引取申候殊ニ見へ申候ハ
長曽我部か旗本と見え候さし東へせり合候とて勘兵衛人数を集
め申候処二十人計足ニ而往候処ニ河原の小より和田の若者ニ申

七騎家来ハ是を力として上下二十四五人走廻ニ付ヶ申候勘兵衛今の
うちすの甲を拵首ニ若者しきほんに是ニ長曽我部か旗本へ一鑓入させ
敵を追ちらし候り追かけ追ちらされ追つ返しつ迫合申候敵
强く候故勘兵衛親類渡辺忠右衛門竹腰治兵衛討死仕候勘兵衛も
後ニ者きり申候処へ高虎様後法右衛門を以て早々引取候へと度々
申て申越候得共勘兵衛今一揉もみ候ハヽ敗軍可仕ニ高虎ハ馬を
出され候かりを寄られ候て長曽我部人数平野まて去人申せてやり
立申ても引候ハ一刻も早く幟を寄られ候へと申遣す 山川之丈
五月六日の朝長曽我部盛親是具足ニ唐冠の兜[illegible]打落され沈
まぎれて大坂城中へ返り[illegible]中ニ諸人を討せ[illegible]

面目なしと申さる故て御前にて有秀郡公の御意にて忠節なりとて褒美に
の其時腹二ツ下にとなり永原松の坊釈しく見しとて候ける先将監治
五月六日河内若江合戦の時井伊掃部頭殿先手川手主水討死故庵原
助右衛門指揮を取大坂勢を切崩す大将木村長門守白母衣に金の
唐り竹白熊の出しにて踏止り防戦する庵原同じ十文字の鑓にて
長門守と鑓合幅ひろき牛の足へと迎てせり合ける庵原鑓の穂を
長門守が母衣へ突込へ引掛さんとする木村ハ重鑓にて庵原か之
たる所へ鑓をつき後引倒されしとしまるを助右衛門強く引かれハ
長門守うつ伏に倒れ沼へ落るを庵原沼へ飛入長門守か首を
取所へ安藤長三郎走り来り其首をおらひられハ助右衛門あって若き仁の手柄

木村長門守と名乗ハ長門守にて首ハ御所へ参りたと云へ長門首まいらせて我等ハ
其外にて名を揚る儀にて御首ハ大坂中へ今日中に於ハ籠城にて下有る
申候由其外の首ハ取あて申さるへしと言方へ入れるとて長三郎に
御しけれハ長三郎取て首を持て先り行を庵原後に戻し母衣絵に
包て持来て有之　大御所様ハ御吟味にて候ハハ母衣武者の首を母
衣に添して八御出云て有とて母衣勝者なれハ助右衛門が家へ入る
来りてハ此方に御申しと召へとて白熊付る金の唐り竹ハ押へて不見
今に庵原方にあるとぞ　扨長門守首を御実検に入られハ中に御織
取て其後御見の御職へ長三郎と名を代て江戸にて御腰物を下され
天下に其名高し助右衛門か其功を悔られハ助右衛門の申には我ハ

挿頭に被らしく此様気なれハ梅むかふかしとハいふなる也長つる前を
見ゆる人の兜に其方向の鍬形并しる甲なり鍬形の角元を菓
唐草なりといふ　古実注
律国右衛門甚之丞甲の形如此
掛緒なり　池田正印之書　其字に天照の二字を書色太刀佩
長篠にて勝頼の陣へ入に戦ふ左近進ハ神康野傳右衛門と一所に八人にて
落る異なく込ゐるに甲の内むれて難儀なりと神康野にも為持能く
破れて此甲邪魔に成いふと云捨ると其時路と見れハ武田左馬助
信豊二三人にて来らる母衣かふし合点つ猶す合字にて諏訪四郎
勝頼と記したり夫てハ渋すやつて来れよとやさる神康野来て返し

右の次第をとやら左馬助大なるの母衣放串ハ捨たり母衣を為持ゆくく
神康野に渡す神康野途に返へ返る内勝頼傳てに居出人を下に急知
勇猛なり今晩病に入菅沼刑部定吉か下へ荷付を申し　柳営物語
関ケ原御勝軍の時　権現様勝山へ御登之ニ成勝て冑の緒をしめよと、ハ
上命ありしと作られ御冑をめし緒緊へ此對面に掛申　武功雑記
何れの陣也時に信長之陣所之の場にて一瀬久之帝此甲を出し
居たるに織田の家老林佐渡守一瀬に向て此甲ハ向なり出されよ
此へとハいかゝ思召さるゝと咎めて出さんとせしに信長公仰せあるハ
寸鍛を一擦のゝなれハ何方より来らんも出すすこ御出させへとし
呈しくハ一瀬西員をすくきさかくせしやとをなる菜のなとしわの裏の

本陣より敵こそ見へたれとてくみたるにすゝみ戦ひて終に大利を得
たりけり一番一番に鑓を合せ首を取して御感に預るに時に一番を得れ
今般の事はいかにと仰られけれは御前にまかりて面目をすゝきしと申けれは御気よみ
よく感状並に刀を賜り樽をも下されけれは拝領せしとかや（佐藤氏先人物語）
天正十二年氏郷本堂を攻し時五月十五日敵本堂か勢多に田中左衛門 畑
紀伊守合子十助を大将として小河表へ刈田に出たるを氏郷家の子に和地
長吉郎といふ者鹿野場に行逢たれは追拂へとて馳向ひ散々に防戦
ひたれは多勢に無勢なれは遂に打負てむなしく討死したる杉原宗兵衛ハ
隣りたれは手勢を引具し鉄炮の者共へ下知れは氏郷いつもの押寄来つらん
とて鐙ふんて打乗馬に乗て地出ハ本堂勢は芳瀬まで引れていさゝを

氏郷勇将にて此戦ひ
もしめハ危き仕合にて
天運に助けし孫子にも
勇者は懼れすといへる
気はれハ是にわたらす
二度目に危く討せしと
宣ふ聞されしハ此合
出来始事〆余勇雄
らいつ及

つき居たる処氏郷寄来戦ひたるを向に氏郷の侍和地孫左衛門岳山源内
菱根惣右衛門岳田文左衛門高宮市五郎野田亀之丞等一番に馳来りしを
討せしと立寄て戦ひたる氏郷は甲にも鉄炮二つ三つ中りたれとも事ともせす
に向に進みに氏郷か勢も追来て終に本堂か兵を討捕たれはさらハ
此戦に本堂を討付にせんとて押寄たれは不思議なりけれハ本堂も一
防もさゝへす悉敗北したる本戸の戦合戦とて今に名高き事とそ（蒲生文武記）
蒲生氏郷伊勢松ヶ島を城となり松ヶ島と日野との間一里程ある時
氏郷足軽を日野の押へに置たり日野方の者共に空鉄炮を放し
氏郷敵出るとて一騎に出て月下文右衛門氏郷に続き来りし松ヶ島
の町を離れて文右衛門先へ出けるに町はつれは城居之左右なるを

畠山文左衛門といふ者家中より伏所存ありと申氏郷を狙ひけるとて家内に
射手を以弓鉄炮にて打出す甲の高き故甲に当り氏郷に中らず長刀
取て氏郷の前をとうけ御座しけれとも家来共家来に近寄りあり氏郷の前を
うけたる侍を也氏郷の前討捕へ日野瀬戸に出けるか氏郷の内出けれ時ハ
瀬滝て日野流続き殺め伏ぬ氏郷流石続き捕て其後付入にして
日野の城を守る者に是日野の旗本と云て氏郷に続く勢七八十騎あり
其通なり氏郷其時ハ十四五万石程の身代なるへきに日野にて罷出て
城守れる時ハ松ヶ島流石続き之日野の城にハ大勢寄合罷ること
地形なりと其後氏郷天下に出て家中の侍共に酒を呑せ居し処鉄炮の
音を聞て其出の如く之或説曰氏郷の甲ハ銀鯰尾にて三人余有之

あまつ尾と申侍鉄炮の疵二ッ有之後加藤左馬之助殿に遣されけるよし
云伝へたるなり　翁物語

蒲生氏郷四十余歳にて剣
百万石と云程の大身にて
世業の士なりとされけり
事にて兄弟されてハ
一去り年とりしかり
彼の家来抱へる時
あとへさる之渡り
すへしと云ふ稽古勝武
在を百万石に取し時
源を流して奥羽乃
大名にてハ大事の故
へりしとて歌をへ
に仕るようとく人の
事之如翁の譜略
にハ有りたるか如く
公能を其の公風の
源よりかしと之侍
しこくし
神の内の不足ハ不得
君を不して和少人然
と以石能に同由にて
翁略にハあり是内生
相うらし

本田正信御家を立退蒲生氏郷へ奉公致し時氏郷甲を出し正信に
これ見て申せと申時一目見て扨く旦那の武辺志願中く古も増せし
家康なとハ無用のおしなる事を自慢あまり結ぶ事ハくまじられね
と也正信か尋ける事を云て任して又御家へ帰り参し其文ハ氏郷甲に鉄炮の疵
二ッ三ッ有しゆへと云伝へ是それそれを見へせられ候に付右の通り正信
とやらん

安斎四郎右衛門物語
正信旧聞書

平野源二左衛門ハ生江甚兵衛と大坂夏の陣へ（初名当初一家よ）
相付て久しく相対して首を取りたる首を取り頭を首へ入く

玉を見出すなりあひかしこまりにて矢平野と物語しつゝ玉を見出しぬ是ハ
冑に玉中り額より血たらたらと流出たるをかゝし持ハす文持を以て玉を
取出し冑ハ大なるの物なり此冑ハ役者より伝わる冑なりと云て物語を
なすに其の君も不思議とし矢平野後細川家に仕ふ 武蔵守光

十二月巳日夕顔に銕斧の斬折本多飛弾守石山に依て葉座山へ来る
明友なれハ本多之孫出宇文帝出向て御機嫌好の和なり今かし
見合せ出られよといふに不動御前の程一尺斗りよかしとある良久
しく御同由かし今般の法を破るもの故と同せのみおねは弟子家の卒
忽なりと訴しなる任に悪しくて弟子のハかりまさるて此鉄
炮に打立られ引ハ見へるしきりの上意なり飛弾守謹て

上意の趣ハ宜して勇士の儀にはあらねども其故にてハ押寄城
底の柵を引破り塀を乗越し子細あるまじとハ思ハず引とれよの
上意に任せ城塀十間斗り引こぼちを乞鉄炮を打るゝ城の矢さまを
開く竹束楯を以て仕寄を付始て楯裏を乗出役目相当を
守しか陣法落着を以て今に楯裏より先に進むべき検使を立られ
実否を糺されよとあらんかに云上す時に御機嫌忽ちに直りて中所
一々御感あり弥勇功を尽しぬべし又飛弾守には不労と御ほしの
御淀みて御手つから御膳の雑子の焼物を御裁して料理を下
面目を施して退出す飛弾守ハ此度の屏下にて打中られたる
鉄炮の玉ぬきとりたる甲を其まゝに飾つけられたるを

うけ具足ハ死人を二誠血の付たるを見て取出したるハ忠用
しくそ見へたる　呉和大坂北
是より山椋へ入海の上ニ出山崎口法界橋筋より山下出城ヶ嶽の様へと
二及程山引返し塀切りたし計下にて引返り敵ハ（のカ）右ニ清兵衛て秀吉様
先を乱さわ西方の弓上手五十四人程前ニ並居を八上せさせてましき
として雨のふるかことく射させ申し先を乱し西を合せてまひ又敵甲の
甚く錣を傾けさしうつむき居申し所ニ谷方より手明口取者大鋒様
左の方よりハ太閤殿を御旗本ニ稲葉ニ清六中ニ四郎左衛門様同組ニ
斗り下（湊カ）津の源右衛門其外より御旗本乱十二人前後左右ニ立並申し乱
矢庭頃ニ申し乱ハ二四人ならてハ合所も無し其剋大閤殿を御陸

甲のテヘンニ矢庭二三筋稲葉ニ清六甲のテヘンニ二三筋口寄太閤様旅ニ立
申ス。寺田源左衛門（壕子）左のふともゝニ射ぬかれ痛手故出陣不成候
申し也　秀吉様も先乱しつれ也御具足にて御在陣（故）かし也　甚くこ申
候ヘ文字で見るも出て成申し也　然とも太閤殿を御旗本ニ申
処まつさく矢数射申し候ハ二日迄そのせり合ニ宮の中刻より二時斗
の内ニ敵勢矢雑ニ中ニ而矢数多く敵中ニ而二万人合戦の先を乱す十餘人
切先をも揃討て是より塀切の上にて差上申し候より秀吉様御勢
追てう帝付に塀勢りさせ申し候　一柳家北
蟹江の城を敵の馬の時敵大手口の門を押入り申候付味方も付深まて
差上りに文左衛門他家よる能味方ニ組猪俣施ニ中り討死仕候ニ付死

髪を切除家近に首を以て出首持来也ニハ　権現様御識ニ成
御意ニハ太郎作を方ニ右首を能ニ不残今日の高名こそ見ヘ申ま
出へと叔母の御意ニ而時太郎作も付而甲のテヘンを抜出候へハ舌打ツ
立候る節を碎け矢の根立以て御礼ハ申間ニ書らく矢一筋太の
カウへを通抜ニ通り中ニ而も疵少近路御意ニ而水野太近一代武功覚え
長篠合戦の時信長公の御孫地こそ扱のもの利家様ぶ御見物福島
平左衛門御下知ニ付大納言様ニ時数の武将武者の付返候を御主来御通
御太刀打ありされ御命ハそねたかる御疵を負せられニ時村井中書後
進付門中而て太刀打いたし治武者の首を取申ニ付甲の後甲乃
まびさし切られあかり太刀くちかけるニあくり申候ハ

信長公より御異見羽織御拝領信ニ而打割血染り不申候ハ信長公御手
つから御着せ下又福島平左衛門殿ニ色葉御礼ニ付大納言様殿く
御指給ニ被下去候ろ者ニ付申上ハ是も利家様御うけとかまわり　利家治領
芳烈公の御代ニ中加太郎左衛門宅ニ武時数寄ニ参会しして武辺咄ニ御
太郎左衛門鴨野の七郎池の御中出し御見甲乙女の甲を結び抜き手池の
時ニ御孫地ニ而甲の緒とうくくせ候ハ太郎いわを打割りて是ハ飛去御通
奉指治なり一生の面を被授と汲出ニ而飛廊一流仕候と承申す太郎左衛門
取出して若戦場の御用ニ而時ハ此甲を戴く存念候へしと存候を
別て秘蔵ニ存ると以一生見付候へて見申時ニ源谷甚左衛門一流して
太郎左衛門こと中ニ色々ニ以申候是も用ニ不立持ニて此我等巻ニ而て野手

但とき入ニ甲不用之

候ハゝ割れ申すとて五郎右衛門赤面して先非の儀ハ前差にて候深谷殿
も割られ候へ割られ不申候に極めては男まさり見事なる兵に
御座候て一生負ける事と思ひきられとも止へきとるなしねハ見物く
甚右衛門か打つ所をと一通して仕とめ甚右衛門兜を取て家居に立
拳を上て甚之丞と申して打て面を織に必死と極め候さるに当て八
切れしめ御まへへきと見へしか八幡坐の辺二寸計り打込しきたる甚
候て手を袖に入て五郎右衛門にいふとも行れもたさに驚き候て
さて力のひとを差より甚右衛門ハ手候坐を立て力を出しおし
用るも有る所御と申て立候る兜を打とて候手を袖と
入しハ以御鉢の甲なれハいかにも筋も手に立しけ入ておもうて入に

割レココロ
レココロヲワタカミヘ付ル

見せしとて袖に入て帰るとぞ　緒陽武家雑談

然ハ秀次公の御形ハ利家公の御移の時村井勘十郎奥足と抜ハ同じ
通ハ頃八時の外に御機嫌よく御武辺の御物語ともなされ其の後結構
の教よりなされ二様鎧にいたし候へハ割鎧に仕候へとの由を承及く
此法尾張の時被仰御物語の陣ハ奥足を御目に掛候ると承りや
其中の事　利家夜話

カニの兜鉢に志ころよりを付見ころ所に結付置て三度組打
いたしたるに付抜て頸を取られし　武功雑記

加州の家人安見隠岐 一万石 大坂の陣の時城内へ押寄てつゝと
困りて切て出る時悪軍に取れつゝ隠岐まち人へ志ころをとるむけ

ところへ敵熊谷か返しけるを又城内より切て出る熊谷又破れしを
隠岐これへ如此に取返しこれへてかゝる時は今日の勝利あるへ
全く隠岐か武功ありとて感しあひけり此隠岐彼と組合ち
せし所下になり首をかゝれんとせしを下より志ころを引おとし
せし所へ侍者律栄と云者馬上にて来かけ隠岐助くへきやと云
下より答しは士は人々の加勢をこそ自分の働とせよといはれは
律は其儘返りけり其後律又思ひ見れは隠岐彼の首を
引さけて居られける上より梅く手をかけといはれは左の手を出し
何のなくさみもなし直に切られぬと言ける組打の時左の指を
二本切れしとなり天下泰平の後隠岐迄切ありとして見近辺へ

その頃武備衰たる世な
重き中将をさするは
脇指をささせ命から
出すといふも士まより
和をあらしめる標準(?)
する古の風に復さす
もの也武功のうちを書
出すは無てる母く
腸房を投棄たると
いふ文例ありとも當
の風は中くらへおお
ゐはあしぬなり
同の若のすくれたる風
おりてあるとなるや

周章ありて逃れしか定て切腹か命乞ゆへし御らんは本多安房守
横山山城守中将何れなりと此中将人に手なりと云て出る安房守
追く来りへといひられは追てくと来り附と方る大坂の働は感し之石
といへとはと書付を讀出しは腸兌を二ふるなけ出し逆て来り
此御家の上ハとて御讀をして能登の西海へ流され子孫繁
たり老後一念記

細川忠興入道三斎或時鳥丸大納言光廣卿へ振舞又々年道中の
大名より使者を以頼れしに不肯く故使者来て路を追て鳥丸家に来る
是は三斎の損敗事にて鬼を一頭仕立家にある故之三斎注文を
書てさをりつゑ物比牛の角下地は桐の木といひ付ける使者帰りは至人

爰等にては指物も地摺の如くに望み持に曲り折れは不仕付にして不用の座
敷に掛ては無益也と申し二三流家々数ヶ様の大指物は折安きやうにし
働く時指物に邪魔なる物なり其時の為なりと挨拶なり使番事も折れ
ぬるやうにとも申し二三流あさ知も戦場に出る者の生て帰らんと
思ふハ不調法なり指物折れハ壊目ゆるとの不審なるハ二つとなき命
の思案ハいかゝ働て指物折らハ捨見たるを取へしたとへ折らるゝ共壊目ハ
又何にても事に命を捨らは何とせられん二つなき命を捨働ける上ハ
指物の年老ハ無用之兵糧をと申ししてよからんと申されけるよし
其望にある人壊に指物絡せしと　武辺咄聞書
かせ士も甲の指物見へるとなりとて多くぬきさゝむつかしき取立

みするもあしゝ兵糧さゝのしと古人ハ語りし但武具ハ指物よ
り急き之大事なることありて見ん不立をよしとし之を旗ハ月花を見ても
色を慰めぬましてや武具なとそつまらしくなる折く取出し見るへき
其の之文陣刀なと名字名家を彫付あらしく持へへき物
なとうちし人のあられし人のかあ織に縫ひなきまにあしく其文字も護つ
謝の中あれハ折く取出して見るもよし謝する驚ける人れハおのつから
上手にもなり弓も射するやうすとなり　備前老人物語
前指物大きなるはあしく堀川にて高上手て相模家付出羽の
其のうちとりて振上は刀前指物につかへて其の逆ゑて討れすて
大久保治右衛門語りきと申し　三河物語

黒田長政大水牛の立物ハ角本をひきねかして兎の辺に至るとかすへ
其の紙にて張付たり江口角左衛門長政功者へ大立物も中立物も
もひ手にてハ一ゑとうけさせ時をつみてぬけるものなりと答る其男ハ
ミミ子服之至へし
菊池の浦野若狭守男なり大ゆるの合戦ある時ハ前夜に水牛の角
汗をかきたり神異奇妙之　武辺雑談
黒田長政若き時まひしハ立物刺物ハ海老を指ゆかしてさしたるか
支障にてハ働く時ハ馬に當りけるとて由しなとゝ落るものなり立物に
穴をあけて其穴を明き筆にて由ひ付へしとなり自分大水牛の
立物をも其まゝ紙にて張付られけるとも時ハ見てさる人へ語りし　武辺咄聞書
津田長門守は道具立物とも日根野織部か唐冠の甲并立物種々熊耳

二尺五寸脇立也但左右の立物ハ耳の事なりけれは折曲て之様にする右刀おも
揮へてつり　同上
尼子経久ハ七千の隊勢を率して佐陀の城を取巻攻られけるか城中より
三百余人鏃を揃へ散々に射立経久も悪て難の家を棄し精兵
五百余前立猶子八百隊精勢を様さへ押させ兵強勢に和山
牛尾下野守備兵既に足軽ともと引て伏兵振りかゝる程に出手塀を
付入に落さんと鯨を絹引出さんとするに城中より今岡源五郎
摩利支天の梵字書たる金の洗米紙を立物にし味方をとし
足軽共に門を開かり出手付入にせんとしたもれとも一つの左右の櫓より
射出さんとせしを見て経久一人を塀へ右へかゝれと軍使を以て

制されける所て日数をへて本城中粮尽ぬれハいさ討て出討死
せんとしけるを今是信輝風雨の時を好て夜討し一人残す切殺
是の内用ニ立人を制しけるハ天文元年八月上旬の事也 関西闘記
天文十六年会利寺合戦ニ畠山高政の家ニ本手と助討死すこの
牛助も安隠太郎の家なり右人牛の猪狩形を立物にして猪形ニ六句を
書付たる運在天見敵無退と云詞なり猪形にも一首の哥なり
人もこゝさし出ぬこそよろしからいくさにこそ出せんけをせそ
太の立物にて討死なり 武辺咄聞書
是後土合志常陸介と大友承従の時大将佐伯紀伊守手廻し
ころ数通一首足ニ小倍る二十郎初正首を取又我も討死す十七歳なり

常陸介安貞正本十郎といふ者の首をとる事小猪形ニ本菖蒲の
出なり短冊を付けり
命よりも名こそおしけれ武士の道ニかふへき道しなけれハ
常陸介感して首尾する畑ヶ坪ニ送り返しけり釈正も是後
大野郡三重江の人なり 常山紀談
天正十二年八月河内国大野山にて佐久間信盛を取ハ人右衛門と
いふて根来のこみつちや 東野大義といふ あると同連至かし方の二人流中村
式部少とせり合の時敵味方人流を立てかしいもち坂といふ所なり
ここつちや居たりをかし方より松の原ニ平江門源右衛門といふ
ものせんすにあり同三十四斗あまりこみつちやかけるさき有り

よく存ぢけ只今也ぞ五節条門元中へ入りたといふ中ニ門を変
と云方中合すれば門ハあらせ候と申といふものを師ふして鉄炮と
あるひ呼ぶなるらこころつちやをてわとて鉄炮とおあやまりて波の
眉先に中りたるを不ふりおくを見しは言わりまつうくとや申る
こころつちやといふ物ハ百歳円紀の用ニ隠れなき鯖の尾を具くぬり
たるなり是をまつ曹を肉の先にささせ外のこころつちや居ゆ紙へ上け
たり物ハ只今の鉄炮を中らさるると思ひ三年後左衛門ニ聞きる所ニ
こころつちやまよりたるまおしの谷合ある所へ立のき二町斗のきて文
道へあられぬを切先なる故申しなりとて手作る百歳肉ニ添ふ
たしらるなり　右橋田彦國書

長久年中ニて東武家ニ二十七歳の角が帯之指白き羽織ニ而宗て廷
思ひ世話をする弱き所へくくと河を弱き中河なり多へ出よくくと云
あるら小口へ出る松山太郎と見て待受くここケンを打一打ニ打落す
家来来りて肩ニかけ河を渡る多人ハ首切て至る故死骸を捨て退る
死骸故首ハ不破銀の小柄を以て捕にする　柏崎物語
浅香庄次郎後左馬助と云ハ奥州蒲生飛騨守の本村ニ仕へ其後関白秀次の
不破伴作蒲生氏の名哉三郎とて天下ニ聞へたる美少年なり
本村か家滅して石田ニ仕へたりしか関ヶ原と称するの戦ニ討死して様
川ニて龍の陣羽織を不破の太刀の三指おくる曹ニて中村か
母衣の士梅田太郎が首をとれ大垣ニ廷帰り二成満矢倉ニ居さる

東雲居士勘案を出されしへと宮川か様に三成当てよし寄けれ
といひけれハ又池田て三成か軍扇を引上てより三成滅して後
加賀美利家にも称されて立去し事あり　老山紀談
大坂陣の時細川忠興家中の冑を見ての時村上八郎左衛門か
大根を立てけるを松井佐渡指物にすると申て佐渡出し名を中ある
冑を云前へしも冑を十二所出合候の時にも毛利家の立物し
見てらる村上八郎左衛門冑かしと云ふ尋佐渡もあらしさ指物にて望さる
に依りし感す村上助右衛門冑ハ二枚屏風を向立に鶏の尾を
頂立にするなれ忠興能立物と称美ありて飛去後の鶏の尾我ら
為の尾に似たる白熊を立しと思召そこにて忠興つれ申も

秀頼を殺す作とて立物にも宋不申ては将しとそ有り　武辺雑談
鴫野合戦上杉先手須田大炊殿先出一時に鉄炮打合て合戦始る
大坂方大軍故大炊殿押立られ引退く大坂勢続きて柵二重
取返し追来る二の先手安田上総殿ハ兼て三町余脇に備を立ゐける
杉原常陸殿も手へ廻れけるが中にも常陸殿鉄炮五百挺立並我身ハ陣地の
際の土堤の上に手を置其上に居て采の指物に冑にて小纏を
振立けるなり須田が人数も方々同じへと下知するに付常陸か後表へ除
き引し須田が勢二つにわかれ右左へ引除　大坂陣覚書
武義の時信長の前へ或者仰付る武功の者とて岡見某出ける其冑に
白熊の引廻しを付て冑立によろいて様に指せて出ぬ信長是を見て

彼のものハ手きゝときゝ合戦にハ終に不合と見へしが白熊の内也しとぞ
ねすしてあるなりしといはれしとぞ　前橋旧蔵聞書
長湫陣にからの頭巾きたる武者の下知するを池田庄三郎追を討んと
する処武者とりくんで返しける紀伊長池田を石川今の唐の頭ハ
神子田半左衛門にて是へしと云御旗本にかけハ神子田半左衛門紀伊守に
左様にて取やん事の様ハ烈しき陣口にハ脇備者をかけ揚しそ終
首をとるハその者なり利家に見逗し欲す所しるハ太閤の者なりて
て首を見ひられハ此者神子田なりと思ひしとぞ　武辺雑談
甲州陣に　権現様の御軍勢白熊を以て幟とすとけ長本多中務
一(ヒトコト)言坂里の戦功抜群なり甲州の人頭に云く

家康に過たるものが二つあり唐の頭に本多平八　駿河草
元亀三年一言坂の戦ひに大久保勘七郎鉄炮打もつす並んで居る
敵筑前守まで敵を射る格別によき徒士筋に於ける働有る
同名平左衛門をむき居る平岩あつらう仰をするしとしてうらちの結を
結ふとのふけし時平八能下知して敵を追拂く退勇威に恐れ不食
となり　神君浜松へ御帰陣之上より成瀬吉右衛門を御使にて平八に
御仰ありしは日頃の平八にハあらず八幡大菩薩の御方をとまり御勝利
極りされけりと思召け御陣の御感なり紀伊守方ハ小杉左近と申者の
今日平八か働きをかんし見付の坂へ立候落首
家康に過たるものが二つあり唐の頭に本多平八

今の長崎のことなり異国の船来りしかとも都の宮なりしかはとも申しへとなり

天文年中異人初て来る大村式部少輔所領今の長崎之浦へ来るとも
元亀二年之比異人持来仕唐の品々多人リキウとかやいふもの尾の
まして内家来に七人不持参本多平八内蔵之丞川井ニツト云者
は三人は眼にも知られは天正二年川井討死大塚孫右衛門首を取唐の品
とりに而之膳形未唐の品を取て見候見せよとて取寄見んと
品数八十万石の膳形さへ大かた西なれは鉢の御拂底となるへは史記の
ものを清家にて七人不持いたしける故清の身上にてるとかや 柏清物語
雛子石帝毎は始関白秀吉公御事なせしにあくまて酒を嗜る時
明智光秀は殿下のために亡ほされし白熊の毛も白くなりし
あまれ胄の上にみるしうけていくさの先駈せんものそと云しと秀次

やかて雛子を賞て是を眷に酒名とて猶白熊をも与へられけるに
雛子石帝御称織にて秘蔵せし陣羽織とられてやりはけ候
いくさのあらん時先きにかけて着せんと云けるか大津の戦に
今日は手柄の立ち草にも今の鯵付たる羽織を光秀の白熊の毛乃
ごくなりと胄の上に乱しかけ十文字の鑓をとりて尾関喜右衛門
と倶に乱れ入敵五六人突伏て胄の緒を傾け一足もひかすしていさと
働けり終に討死せしかる君は是なれとも結いたる白熊にて敵
味方の目を驚かす討死をとけたり 常山紀談
木村常陸介の臣尾田多右衛門は 元仕明智光秀後仕秀次公仕前田家其所亡子孫 山中の城攻に
従将正居に疵して辞職の時尾田太右衛門あたりをうけ胄に白熊の

引返しの付たるを風の吹まくとあるを以て押へたる部分に出たるの
旗を落城と見へは差添の旗を切て其まゝにしおかれよろしく出て風
情冑から気勇士の気勢あり木村例河合小兵衛を呼て
これに差添をと連て引取しむとそ従将岡田と営に寄すけ共
夜に戦功あり木村河合を兵を見るんとあるに如此見へたり 武家事紀
江戸御戦の時黒田長政の家臣塙蔵文左衛門年房か形の甲あり
孔雀尾の腰巻し根の毛へ修する大天衛の勝手稲に墨縄とそ云
河原に畏くつぎ申一つ上る 小説軍記
台徳の　秀忠公御本陣ハ幔幕をうち廻し寄手に備へ白旗廿本
御紋の旗七本金の扇の御馬印ありて高達の御陣羽織唐の紋

右の引合に見え帷幕の図に御前にある例の旗の中記せる名したる
首とも実検ありし後披露する幕場へいつまても集り首
とも自分捕来する事もあり又使を以て差上る人もあり手柄の者ここ
ろ首のさしりなしぬもあり 大坂表陣帷幕記
石谷土佐入道曰陣具ハとかく手軽きをよしとす手重く丁寧にして
一陣つとめられても一度もけぬなりそこねぬなりとて自得
せんもいかかなり冑の下ハ手拭にて頭の方より色をたるゝ冑
動かすして甲の緒も志つかりとしてよきなり是ハ父世之西部
れしへられしと云 武功雑記
関ヶ原の軍済みの日細萩長つる至孝大藪の陣所にて田使と

江てとく大垣に入て一所になられしなとゝいひ送られしかハ至孝大垣に
酒井を徒承九馬助壽昌市橋下総守正節某にハ伊蔵
今左衛門母衣に蛇の目の紋付たるとうけ三宅平左衛門と云ける
二様敵し本丸に十四五騎追かけたり伊蔵大書上ケ大なる紋所敵なり
勝負のあせてとかくて引退く三宅も又是より下立しか周の者あり
猿て馬の口に付てある下人をふさ傷して引けるぬ歩立にて組て
続と合せんとせしに日も暮ぬ静に退く所に正節ら去市橋
勘左衛門追付て詞をかける三宅むかしより馳し添かひ是れも
立ひまもあらそひ夜中継とも知らさるに引退ぬる
こそさひも心なれ夜ふけて戦果何の功名かあるへきといひさとて

立別れられ至孝大垣に入て三宅ハ討れしかハへんとこそ思ひて帰り
来りて志ありくなりとしいへハ至孝恨んで康元なる一言によりて鞍
立て年へ三歳ハ弟今三十歳門出初めにて志ある所ある伊蔵三
十六七の頃より功名ありて兜ハ水色赤きを指物とし給れハ係の
赤き指物出られし世にいはれしものなり　常山紀談
秀忠公御小姓にて細川忠興より御右の御甲一つ送り為上候刻
見角頭巾の形なる立てたる形なり其御甲を土井大炊頭利勝拝領
なり　上意ありて御感の餘り刻鐵中なるを召出され種々御褒美
あり御甲にねらひ付し緒を兜の緒に付られしかそれハ
上意にハ兜の緒にハ麻布にて仕付けよとの御事なり

雪降甚しきといへとも鉄の御法を添せんとて志深く其葉を取古書なと参りたり其より彼人此書を撰ひし之は筆の名して此書の名なり

然れども其香総かくし所不審なりと其鉄中なる穂中より桐の
葉を見出し其内に麻布の如きの袋を入て其下なる物大切なるに
包ひて其総を付申けるハ此飛騨守の例にて此様になられハ此扣
に付けるその故別に仕色ふべし　御茶にて付出し其上にも上
これハ余りに御孫の織姫之此甲を大坂御陣中にも被為在る之　古実伝
大坂の前桐の者を討取て海の附荒木摂津守内文中ハ城より人数を
出する者を討取て櫓に上り見るに海手ハ敵船一艘も有し
陸地の敵も悉見逃るにも従く付て騎馬廿七十騎の内介なりと
云ふとも同心なきれハ荒木勝之し我一騎也入討死して志を遂
せんとて　胄の緒をしめ　蓬莱(ホレマダラ)の母衣かへるさまに其家臣に

其出るとはつれも制止候へ共敵に向ひて不聞入なれハ相違て候内
不遂本意な忠とやいへし　寛永親武鑑
家康公本村の討死の志を感し給ひけるに附に近臣評して日本村
長門守討死を兼て思ひ定けしかてと被仰し其故を月代を剃ぬ
そらすとかや　家康公見を御覧し哀れ討死の志を月代を剃て
と語て首を見られけるは甲とを具に其ひの緒を見せられると
甲を首ともに見せさせられて忍ひの緒を結んて端を切ける
是兼ひ兼すかけとの志を顕はすなれハ討死ハ兼て思ひ
定めけると語られる　皆人是を感しける　東武実録
荒塚西田荒鎮程を降参の士なれとも弓矢の道に達し誠に於

老臣優長なる人なりとて龍造寺隆信に親しみ給ひ
某の子を猶子にせられける今度も隆信が陣に引具しておはし
しけるが其の者共退散されし方へ行んと志けるが道にて
保集院が鉾先を塞がれ深田の畔を西に向ひて歩せ給ひけるを
深田にかけ落し馬はまり入てけれハ深泥胸板を過るほど種子
冑をハ兜す其内西国に流行し花笠とかや云ふ笠の
やうなる内甲に矢二筋射立られく深田にてあかりもやらす
討れ給ひけり 九州治乱記
いらふ退口の時敵強く追かけしを大久保治右衛門覚くあるまし令
く防きてのさしも時ハそうかさとて編笠の衣のそうくる
と見て退ぐり敵咲かけてもそうかさとてハ見るまなう
名字をハくくと云けるを名もなきとて名字す大井川と
渡り向ふにて指しくる鉄炮を是野右衛門太夫よこれ手我らに
なり必其前にとて渡し我を落しして来てとて川端より川
かしこに捨てうしせ給ふ敵門東へ石橋宗運一の先の敵を門中
其後すまうら敵つかうす内藤源五左衛門尉勝次太
行とて名字をそ名字ともこそ敵にその身をさらして者へさし申
されは時ケ杭の時も名字をもちの敵名を守て喚けるて
さうとてハ見えるなりさ〳〵よといひおれる時実は続うすまん
ゆのめの一人討れハ総領になるの人と各同年と年兄の気に

致申候を各言て先と致申候其時　家康様より星野
兵部左衛門に鉄砲を持せ遣し候を後まて持申候つる　三河の物語
駿州今川家の士に城所助之丞牧孫左衛門と申武功場数の者
両人御座候城所助之丞ハ毎陣に桔梗笠を着し出申候付
権現様氏真公と御合戦の節も徳川の兼角今川の桔梗笠と
世間へ申触申候よし兼の角と申候ハ大勝様の御事也右の孫左衛門ハ
壱岐守より十五六年以前相果申候其孫左衛門悴宗次郎と申者
二三歳之時相果申候を孫左衛門妻引連駿州の国立川へ引籠養育
仕候宗次郎十八九歳に罷成候て亡父の事を母に尋候へハ今川
家にて牧孫左衛門と申隠れなき武勇の侍にて其名を顕（コワカ子）

孫左衛門と申候何年以前に相果申候哉と尋ければ母申候ハ
孫左衛門ハ別て無双の侍にて城所助之丞と申者の今川氏真様に
御座候時分三州武士に兼の角今川家に桔梗笠とハ助之丞か
事に候へ共平八郎殿よりハ助之丞を同前に存助之丞ハ未た若き
事に候遂合せんと互に存候処其家中より平八郎殿
助之丞を大切に思召候故未練なる事へ参し申候へは毎度
申せられハ夫より宗次郎様之駿府の助之丞方へ参り孫左衛門
悴のよし申せ候何卒一度武勇の功を立申度存候よし
起に相入申候助之丞大に感し涙を流し我等一命にかけて
取立可申と約束いたし候此時宗次郎申候ハ右様御意の

以て桔梗笠を御借つかハされ候追て三河表と御合戦御座候る
急き候にハ本多平八郎殿も篠を今世中と望申候
時節ハ勝ち先ず当惑つかまつりし所忠勝と望候故桔梗笠を家次郎
にかかり申候其笠を着仕り一戦の忠勝様を心を果して篠を
命申候之忠勝様家次郎を実状のひ首を取えてと被と思召て
桔梗笠を御もつへし御返し候へハ勝ち先ずてハ世御座前後之の
実録と相違する勇士と申す下記
候しくハあられなきるまき
若武者にて御座の故其方勝ち先ずてハ急しいつかまつるそのそと
御尋ね被成候ハ松家次郎と申すものなり平八郎殿と見えかひ篠を
今世一生の名誉にいたし右桔梗笠を勝ち先ず無理に不望仕
御出し出陣仕り申す神妙申上候へハ忠勝様さとく其方と思召

されて御もらハ互ひにつこおは退り申し其方武運強く候つらむ申
へくん此方利運におゐてハ如何かひ恭を再も来られ候へハ候さっそく
御安心に存る数し御縁来にて御引取れ被成候其後今川家
没落仕忠勝様は家次郎等気御暇申上右 本多家武功書出
権現様御前にて悦ひ候ハ笠にてあるへく御用ひ又大雨のときなり候
羽織ハ雨のときの毛氈より 武士談話
以銅作笠着起自小野本縫殿重勝為先烽畢報也是
故称小野本笠 寛元聞書

大日本帝國圖書之印

国立公文書館
National Archives of Japan